

---

# 『大東亜共栄圏綜合貿易年表』からみた 1930年代後半東アジアの食品貿易

## Food and Beverage Trade in East Asia in the Late 1930's seen from "Annual Return of the Trade of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere"

荒木 一視\*

ARAKI Hitoshi\*

(摘要)

『大東亜共栄圏綜合貿易年表』に基づいて1930年代後半の東アジアの飲食物の貿易を検討した。その際に、留意したのは1国と1国間の貿易、あるいは1国と多国間の貿易ではなく、多国間相互の貿易パターンを描き出すことである。1930年代の資料が限定される中で、こうした相互の貿易パターンを把握できる資料として着目したのが、この貿易年表である。「泰国」「中华民国」「比律賓」「東印度諸島」「仏領印度支那」「ビルマ」「大日本帝国内地」「台湾」「朝鮮」「満洲国」などの主要な飲食物の国別貿易量、および貿易額の分析から、以下の知見を得た。①砂糖や煙草、酒、畜産物などでは東アジア各国と欧米との貿易が卓越するものが見られた。②青果物や水産物では東アジアの各国間での貿易が卓越している。③多くの品目において植民地を含む大日本帝国の領域内で完結性の高いものが見られた。

キーワード：『大東亜共栄圏綜合貿易年表』，東アジア，1930年代後半，食品貿易

(Abstract)

A study was conducted on the food and beverage trade in East Asia in the late 1930s, based on data from the publication, "Annual Return of the Trade of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere". The study focused on trade patterns not just between two countries or one and multiple countries but on multilateral trade patterns among several countries. Although reference material from the 1930's is limited, this trade statistics was found to be useful in learning about mutual trade patterns in those days.

Analyzing the major food and beverage trade volume and trade value of Thailand, the Republic of China, Philippines, East Indies, French Indochina, Burma, Mainland Japan, Taiwan, Korea and Manchukuo respectively, the following findings were obtained.

1. Trade of sugar, tobacco, liquor and animal products between East Asian countries and the United States and European countries was significant.
2. Trade of fruits, vegetables and marine products was dominant among East Asian countries.
3. Many items were traded within the territory of the Empire of Japan including its colonies.

Keywords: "Annual Return of the Trade of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere", East Asia, the late 1930's, food and beverage trade

---

\* 立命館大学食マネジメント学部

*Journal of East Asian Identities* Vol. 9 March 2024 (pp. 1-18)

## 1. はじめに

本論の目的を端的にいうならば、1930年代後半の東アジアの食品貿易<sup>1)</sup>の解明である。そこに着目する背景は以下の通りである。アジアの食品貿易という点については「アジア間貿易」の議論を展開した杉原(1985, 1996)による優れた先行研究がある。そこでは「アジア間貿易を支えた農民、労働者の追加的購買力の大宗は、実は綿布や雑貨に向かったのではない。エンゲル係数の極めて高いこの段階では購買力は主として主食用穀物や若干の香辛料、海産物などに向かった。中でも米が彼らの支出に占める位置は決定的に重要であった。」とする。ここに示される主食用穀物である米、あるいは小麦・小麦粉の貿易については荒木(2023)において検討した。一方、「若干の香辛料、海産物など」についてはどのような状況であったのか、この点の解明を試みるのが本論の意図するところである。

その際、当時のアジアの国や地域間の「若干の香辛料、海産物など」の貿易の実態はどのようなものであったのかをアジアの多国(多地域)間相互の貿易から検討するという事に留意した。従来的に特定の1国(地域)を取り上げて、その貿易相手との輸出入の動向を把握するという取り組みは少なくはない。いわば1国を基点とした把握である。例えば、この時期の朝鮮の穀物貿易を取り上げた竹内(2009)、台湾からの米移出を検討した矢ヶ城(2010)、中国の一次産品の輸出を論じた木越(2020)などがあるが、いずれも特定の1国(地域)を取り上げた研究にとどまる。

また、筆者のこれまでの研究においても、荒木(2016)では新義州税関資料を用いて日本統治下の朝鮮と満洲国間の貿易を論じ、荒木(2019)では『中国各通商口岸対各国進出口貿易統計』を用いて中国と各国の貿易を論じた。また、荒木(2017)においても、日本の食品企業の海外展開を論じ、さまざまな調味料や海産物がアジアや世界をめぐるフードチェーンを構築したことを明らかにしたが、それも日本という一国単位の分析にとどまる。いずれにしても「一対一」あるいは「一対多」の貿易の検討となり、「多対多」の貿易パターンは把握できていない。その背景として、国ごとに個別の統計基準の違いを指摘できる。当時の国際貿易が今日のような国際的に統一された貿易品目の基準で把握されていたわけではなく、個別の国々の貿易統計は存在するが、国によって集計基準はまちま

ちであったからである。しかし、そうした1国(地域)単位の分析では十分に当時のアジア間貿易の実態を解明できないのでは無いかと考えた。

そこで注目したのが『大東亜共栄圏総合貿易年表』である。同年表は1942年から翌年にかけて神戸商業大学教授・生島廣治郎を責任編集として東亜貿易政策研究会から刊行され、第1表に示すように『第1巻 泰国』から『第9巻 満洲国』に至る都合10巻で構成される<sup>2)</sup>。『大東亜共栄圏総合貿易年表』の特徴は一定の基準で、多国間、多地域間の貿易統計が整備されていることである。無論、前記のように国ごと、地域ごとに統計の基準や配列はまちまちであり、当該国、地域で使用される言語によっても品目のカテゴリーは異なる。また、当地の習慣などによっても集計の仕方が異なる場合があり、とくに食品についてはこうした文化的背景の影響が、工業製品などと比べて大きいと考えられる。こうしたカテゴリーの再集計に当たっては、同年表冒頭にも書かれているように、品目分類や再配列が完全に正確に行われたわけではない。ただし、一定の統一基準で多国、多地域の貿易統計を比較を前提に再編成した資料は他にないと判断した<sup>3)</sup>。

また、同年表の対象とする時期は第1表に示すように1930年代後半である。この時期は荒木(2017)や荒木(2018)、あるいは大豆生田(1993, 2007)に描かれるように、帝国の米自給体制が崩壊する直前にあたるとともに、1940年代に入ると戦局の激化と終戦へと向かうため、戦前の日本のフードチェーンの海外展開が一つのピークを迎える時期でもある。そうした時期の東アジアの食料貿易を一定の基準で把握できる資料として同年表は有効であると考えた。

以下、第2章では各国・地域ごとの貿易全体における飲食物の位置と主要品目を、第3章では各国・地域ごとの貿易相手を検討した。

第1表 『大東亜共栄圏綜合貿易年表』各巻の典拠

巻	対象地	典拠	対象年度 (昭和)	備考
I	泰国	Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Thailand, Year 2487. April 1938 to March 1939. Published by the Department of his Majesty's Customs, Bangkok.	12	現在のタイ暦・仏暦(仏滅紀元)は1月から12月までであるが、1940年以前は4月から翌3月までであった。このため本論で示すデータは4月から3月までを年度としている。なお、昭和12年は仏暦(仏滅紀元)では2480年、昭和13年は同2481年となる。
			13	
II	中華民国 北支那	中華民国28年12月、29年11月「華北海關進出口貿易統計月報」(天津英租界達文波路五十号中外印字館)等	13	昭和15年度は11月末までの数字
			14	
			15	
III	中華民国 總覽	中華民国28年及び29年、海關中外貿易統計年刊、巻一上冊「貿易報告」下冊「進出口貨物類編別表」巻二「進口貨物類編」巻三「出口貨物類編」(上海稅務司署統計課編印)	12	
			13	
			14	
			15	
IV	比律賓	Commonwealth of the Philippines, Department of Finance, Bureau of Customs, Manila; Annual Report of the Insular Collector of Customs to the Honorable Secretary of Finance, 1937, 1938 & 1939, Manila, Bureau of Printing.	12	英領印度には海峽植民地を含む
			13	
V	東印度諸島	Department van economische Zaken, Publicatie van Het centraal Kantoor voor de Statistiek, Jaarbericht, Jaaroverzicht van den In- en uitvoer van Nederlandsch-indië gedurende Het Jaar 1935, Deel I, II; 1939 Deel I, II, III; 1940, Landen van Oorsprong en Bestemming (Voorloopige cijfers)	10	旧蘭領東印度
			14	
VI	仏領印度支那	République Française, Gouvernement Général de l'Indochine, Administration des Douanes et Régies; Statistique Mensuelle du Commerce Extérieur de l'Indochine, Decembre 1939, Hanoi, Imprimerie d'Extrême-Orient, 1939.	12	
			13	
			14	
VII	ビルマ	Annual Statement of the Sea-Borne Trade and navigation of Burma for the Fiscal year ending March 31st, 1938-1939. (Compiled in the Office of the Collector of Customs, Rangoon, Superintendent, Government Printing and Stationary, Burma, 1940.	12	
			13	
VIII 上	大日本帝国 内地	大蔵省編纂「昭和13年日本外国貿易年表上、中、下篇」(昭和14年12月外国貿易月表) 台湾総督府財務局編纂「昭和13年台湾貿易年表」(昭和14年12月台湾貿易月表) 朝鮮総督府財務局編纂「朝鮮輸移出入3年対照表(自昭和12年至昭和14年)」 南洋庁編纂「第7回南洋統計年鑑」	12	朝鮮からの貿易量のみが石の単位で記載
			13	
VIII 下	大日本帝国 台湾・朝鮮	大蔵省編纂「昭和13年日本外国貿易年表上、中、下篇」(昭和14年12月外国貿易月表) 台湾総督府財務局編纂「昭和13年台湾貿易年表」(昭和14年12月台湾貿易月表) 朝鮮総督府財務局編纂「朝鮮輸移出入3年対照表(自昭和12年至昭和14年)」 南洋庁編纂「第7回南洋統計年鑑」	12	
			13	
IX	満洲国	満洲国經濟部編纂「満洲国外国貿易統計年報 康德5年 上篇」「満洲国外国貿易統計年報 康德6年 上篇」	12	満洲国と関東州にわたる満洲経済地域の範囲
			13	
			14	

注 元の表記は旧字体である。  
 泰国の「forein」、比律賓の「insulor」は原文のまま

## 2. 各国・地域の貿易に占める「飲食物」貿易および主要品目

### 2.1 貿易総額における「飲食物」の比率

ここでは『大東亜共栄圏綜合貿易年表』に基づいて貿易総額に占める「II. 飲食物」の構成比を検討する。同年表各巻は輸出入品目が「I. 穀物、穀粉、種子」に始まり、「II. 飲食物(煙草ヲ含む)」「III. 畜産及飼料」「IV. 油脂及同製品」「V. 肥料」から「XV. 金属製品」「XVI. 機械類、船車、時計及學術器」「XVII. 雑品」に至るまでの17のカテゴリーに区

分されている。ここで取り上げるのはそのうちの「II. 飲食物」のカテゴリーで、第2表では各国・地域の貿易の総額(輸出入)とそれに占める当該カテゴリーの貿易額の比率が示されている<sup>4)</sup>。

ここから読み取れるのは以下の各点である。まず、「比律賓」や「台湾」が輸出額の4～5割を同カテゴリーが占め、「飲食物」輸出に特化している<sup>5)</sup>。また、4割には満たないものの、「中華民国北支那」「中華民国」「東印度諸島」なども2割前後の比率を擁している。一方で、「泰国」「仏領印度支那」「ビルマ」「大日本帝国内地」「朝鮮」「満洲国」などは同比率が1割に満たない。とくに域内で最大の米輸出

を誇った「ビルマ」のそれは1%にも満たない。同様に「泰国」や「朝鮮」の米輸出、「満洲国」の大豆輸出などはこのカテゴリーに含まれないためでもあるが、これらの国・地域が食料の中でもとくに穀物輸出に特化したものであったことがうかがえる。

次に、「飲食物」輸出が入超になる国・地域と出超になる国・地域、及びそれらの拮抗する国・地域である。入超の例として「泰国」「仏領印度支那」「ビルマ」「満洲国」、出超の例として「中華民国北支那」「中華民国総覧」「比律賓」「東印度諸島」「台湾」、拮抗する例として「大日本帝国内地」「朝鮮」となる。入超のものはいずれもかなりの穀物輸出を誇る国・地域であり、穀物を含めると出超となる。例え

ば、米の輸出額の総輸出額に占める割合は「泰国」で44% (S12), 48% (S13), 「仏領印度支那」でも約4割, 「ビルマ」も4割超, 「満洲国」の大豆の輸出額が総輸出額に占める割合は約3割である。これらの国・地域は大量の穀物を輸出しながら, 総輸入額の1割余り, 「ビルマ」では17%余を食品輸入に充てていたといえる。一方, それ以外の多くは基本的に入超となり, 「飲食物」貿易が一定の役割を示していたといえる。また, 拮抗するもののうち「朝鮮」も米が総輸出額に占める割合は3割を超え, 米を含むと食料輸出が入超となり, 「大日本帝国内地」のみが特徴的に食料貿易の構造が異なるといえる。ちなみに「大日本帝国内地」の米輸出が総輸出額に占める割合

第2表 『大東亜共栄圏綜合貿易年表』各巻で取り上げられた国・地域の貿易概要

国・地域	通貨単位	昭和10年度	昭和12年度	昭和13年度	昭和14年度	昭和15年度
泰国	輸出総額	パーツ	169,492,804	204,422,088		
	輸入総額	パーツ	111,824,481	129,630,731		
	うち飲食物比率	%		2.2		
	うち飲食物比率	%		15.7		12.6
	うち飲食物比率	%				
中華民国北支那	輸出総額	国幣元		254,526,723	280,050,765	295,451,915
	輸入総額	金元		138,576,941	231,191,523	336,058,320
	うち飲食物比率	%			16.0	25.1
	うち飲食物比率	%			7.7	12.5
	うち飲食物比率	%				
中華民国総覧	輸出総額	国幣元	838,255,705	762,641,058	1,027,246,508	1,970,120,647
	輸入総額	金元	419,352,287	385,573,715	538,855,592	748,852,253
	うち飲食物比率	%		17.1	17.8	17.3
	うち飲食物比率	%		7.3	7.7	10.6
	うち飲食物比率	%				
比律賓	輸出総額	ペソ	302,532,500	231,590,554		
	輸入総額	ペソ	218,051,490	265,215,095		
	うち飲食物比率	%		42.6		48.4
	うち飲食物比率	%		12.4		14.8
	うち飲食物比率	%				
東印度諸島	輸出総額	盾 (ギルダー)	459,328,709			753,576,080
	輸入総額	盾 (ギルダー)	274,023,861			522,390,451
	うち飲食物比率	%	26.4			23.6
	うち飲食物比率	%	12.0			9.2
	うち飲食物比率	%				
仏領印度支那	輸出総額	千法 (千フラン)	2,594,098	2,843,837	3,494,725	
	輸入総額	千法 (千フラン)	1,562,365	1,947,256	2,382,261	
	うち飲食物比率	%		4.8	5.2	5
	うち飲食物比率	%		12.7	12.1	11.3
	うち飲食物比率	%				
ビルマ	輸出総額	留比 (ルビー)	504,320,601	485,015,747		
	輸入総額	留比 (ルビー)	238,137,588	207,778,754		
	うち飲食物比率	%		0.9	0.9	
	うち飲食物比率	%		17.0	17.3	
	うち飲食物比率	%				
大日本帝国内地	輸出総額	円	4,187,908,880	3,912,169,699		
	輸入総額	円	4,781,782,881	3,768,299,622		
	うち飲食物比率	%		7.7	9.3	
	うち飲食物比率	%		6.8	7.0	
	うち飲食物比率	%				
台湾	輸出総額	円	440,174,995	456,453,837		
	輸入総額	円	322,123,742	366,569,192		
	うち飲食物比率	%		53.3	51.5	
	うち飲食物比率	%		13.2	13.2	
	うち飲食物比率	%				
朝鮮	輸出総額	円	685,542,752	879,606,257		
	輸入総額	円	863,552,502	155,928,465		
	うち飲食物比率	%		6.2	6.4	
	うち飲食物比率	%		6.4	6.1	
	うち飲食物比率	%				
満洲国	輸出総額	国幣円	645,297,656	724,013,661	834,717,054	
	輸入総額	国幣円	887,411,696	1,273,880,795	1,799,146,952	
	うち飲食物比率	%		1.7	2.0	2.1
	うち飲食物比率	%				13.4
	うち飲食物比率	%				15.5

中華民国北支那の昭和15年度は11月末まで本文中の輸出入総額に占める比率の根拠となる数値である。

は0.1%余にすぎない。

## 2.2 飲食物貿易における主要品目

第3表は各巻で取り上げられる国・地域ごとの主要貿易品目の一覧である。ここで取り上げられているのは各々の輸出入総額の1%以上を占める品目である。

なお、参考値として0.9%のものまで表示しているが、これをもって各々の主要貿易品目とした。輸出金額や通貨換算を要することから、国・地域間の直接的な比較は難しいが、一国・地域の中で食品の持つ位置を把握することは可能である。

ここではあくまでも「II 飲食物」の項目に記載さ

第3表 主要貿易品目とその貿易相手

国・地域	輸出					輸入						
	構成比上位品目	各年度の総額に占める割合 (%)				主要貿易相手	構成比上位品目	各年度の総額に占める割合 (%)				主要貿易相手
	S10	S11	S12	S13	S14	S15	S10	S11	S12	S13	S14	S15
泰国	鹹魚	1.1	1.2	シンガポール、香港			ミルク	3.3	2.7	蘭、スイス、米		
							糖糖	3.1	2.7	蘭印		
							菓煙草	2.1	1.3	米		
							煙草	2.9	1.9	英		
							其他蔬菜	1.6	1.6	中、香港		
中華民國北支那	卵製品	6.2	13	14	英、米、独		糖糖	3.4	7.1	5.1	日、台	
	煙草	2.0	2.0	日、滿			水産物	1.3	1.7	2.4 日		
	胡椒	1.5		1.7 米、加			缶詰食品	1.3 日				
	塩	1.4	1.8	2.0 日			煙草	1.1 米				
	獸脂	1.1	2.0	0.9 米、独、仏								
中華民國総覧	卵製品	5.4	5.6	7.0	6.1 欧米		糖糖	2.1	2.1	3.9	3.3 アジア	
	茶	3.7	4.3	3.0	5.3 香港		煙草	2.3	2.5	2.8	2.4 米	
	煙草	1.1	1.3	1.0	香港、アジア		水産物	1.3	1.1	1.3	1.6 日	
	獸脂	1.4	1	1.4 欧米								
	其他鮮乾塩蔬菜	1.3	1.3	1.1	0.9 香港、海峽植民地							
	生卵	0.9	1.0	欧米								
比律賓	砂糖	38	35	米			煙草	3.4	6.0	米		
	煙草	3.3	4.2	米			ミルク	3.0	2.9	蘭、米		
	鳳梨(缶詰)	1.1	0.9	米			缶詰食品	1.9	1.8	日、米		
東印度諸島	砂糖	7.8	10		印、英、香港、日、エジプト、蘭		水産物	3.4	2.2		シンガポール	
	茶、葉茶	7.3	7.4		蘭、英、豪、米		煙草	2.6	1.8		英、蘭、米	
	煙草	6.4	3.6		蘭		酒類	1.6	0.9		蘭、独	
	コーヒー	4.1	1.6		仏、蘭		薬味及調味料	0.9	1.2		英領アフリカ、シンガポール、マダガスカル	
							ミルク及同製品	1.0	0.9		蘭	
仏領印度支那	生乾塩魚介類	2.8	2.8	2.4	香港、シンガポール		酒類 葡萄酒	1.9	1.8	1.6	仏、アルジェリア	
	鳥卵	0.9	1.1	香港、シンガポール			ミルク及同製品	1.7	1.7	1.5	蘭、スイス	
							紙巻煙草	1.5	1.5	1.3	アルジェリア	
							乾果実 檳榔子	0.9	シンガポール			
ビルマ							煙草	3.7	4.3	印		
							ミルク及同加工品	2.1	2.4	蘭		
							水産物 乾塩魚	2.0	2.1	印、海峽植民地		
							茶 紅茶	1.4	印			
							酒類	0.9	1.0	英、独		
							玉葱	1.1	印			
大日本帝国内地	缶詰食品	2.3	2.7	英、米			砂糖	4.7	4.7	台湾		
	水産物	0.9	1.0	日滿支								
台湾	砂糖	44	42	日			煙草	3.1	2.1	日		
	芭実	2.8	2.9	日滿支			乾魚介	1.4	1.3	日		
	茶	2.8	2.7	米、日滿支、英			塩魚	1.2	1.0	日		
	鳳梨缶詰	2.1	2.3	日			清酒	1.2	1.6	日		
	切乾薯	0.9	日、朝				味ノ素類	1.1	1.1	日		
							缶詰食品	0.9	1.4	日		
							麦酒	0.9	1.0	日		
							菓子類	0.9	日			
朝鮮	水産物	3.4	3.5	日、(滿)			水産物	1.1	1.1	日		
							糖糖	1.0	0.9	台		
							水給及菓子	0.9	1.1	日		
滿洲国	其他ノ飲食物	1.1	1.2	1.4	日		其他ノ飲食物	4.2	4.3	日		
							砂糖	2.8	2.4	日、台		
							水産物	1.7	3.1	日		
							缶詰食品	1.5	日			
							果実	1.0	日			

れている品目に依拠し、「I 穀物」に含まれる米や小麦、小麦粉は別である。なお、この地域の米、小麦および小麦粉に関する多国間貿易の動向については荒木(2023)に詳細を譲るが、概略は以下の通りとなる。第一に「大日本帝国内地」と、「台湾」、「朝鮮」あるいは「満州国」や「北支那」など帝国の領域内やその影響圏<sup>6)</sup>の中で米の自給体系が構築されていたこと、第二に「泰国」と「仏領印度支那」、「ビルマ」が巨大な米の輸出国となっていたこと、第三に「比律賓」や「東印度諸島」など商品作物輸出に特化した植民地が穀物の輸入国となっていたことと「中華民国」が米麦の一大需要国であったことなどである。

第3表からは一大米輸出国であった「泰国」や「仏領印度支那」、「ビルマ」からの「飲食物」の輸出は多くないことが読み取れる。「泰国」の「鹹魚」が総輸出額の1%程度、「仏領印度支那」の「生乾塩燻魚介類」が2%余、「鳥卵」が1%程度で、「ビルマ」では総輸出額の1%を超える品目は存在しない<sup>7)</sup>。それぞれの米輸出が総輸出額に占める割合は、「泰国」が44.5% (S12)、47.7% (S13)、「仏領印度支那」が42.2% (S12)、35.9% (S13)、39.7% (S14)、「ビルマ」が41.4% (S12)、43.7% (S13)<sup>8)</sup>であり、食料輸出は米に特化していたといえる。一方で輸入は、「泰国」では「ミルク」「精糖」「葉煙草」「煙草」などが総輸入額の3%前後(昭和12年度)を占め、「仏領印度支那」でも「葡萄酒」「ミルク及同製品」「紙巻煙草」が同1~2%と上位となる。同様に「ビルマ」も「煙草」「ミルク及同加工品」「水産物・乾塩魚」「酒類」などが上位に並びいずれも、同1~4%程度である。多様な食品が一定程度輸入されていたことが確認できる。

一方、米麦の輸入国であった中国であるが、「中華民国総覧」及び「中華民国北支那」を通じて「卵製品」が食品輸出の主力となり、輸出同額の5~10%以上を占める。これに「茶」や「煙草」「獸腸」が続く。一方の輸入では「精糖」「煙草」「水産物」が主要品目となり、輸入総額の1~4%を占める。卵と茶の輸出が特徴的である。

次に、この時期商品作物輸出に特化していた「比律賓」と「東印度諸島」であるが、「比律賓」の主要輸出品は「砂糖」が30%台を推移し「煙草」の3~4%、「鳳梨缶詰(パイン缶詰)」の1%前後となる。輸入品については「煙草」「ミルク」「缶詰食料品」があげられる。「東印度諸島」でも「砂糖」と

「茶(葉茶)」が輸出総額の7~10%を占め<sup>9)</sup>、それらに「煙草」や「コーヒー」が続く。輸入では「水産物」「煙草」「酒類」「葉味及調味料」「ミルク及同製品(コンデンスミルク)」となる。特徴的な商品作物輸出が確認できるとともに、多様な食品輸入も認められる。

最後に、穀物貿易では帝国の領域を中心に大きな米輸入と小麦輸出が認められた「大日本帝国内地」であるが、「飲食物」の占める貿易比率は決して多いわけではない<sup>10)</sup>。輸出では「缶詰食料品」と「水産物」が主要品目で、輸入では「砂糖」が輸入総額の4.7%を占める最大品目である。その「砂糖」の一大供給地でもあるのが「台湾」であり、「台湾」の輸出額の実に40%以上を「砂糖」が占める<sup>11)</sup>。これに続くのは「芭実(バナナ)」と「茶」「鳳梨缶詰」で、いずれも同2%余である。一方、「台湾」の主要輸入品目は「煙草」「乾魚介」「塩魚」「清酒」「味ノ素類」などでいずれもが輸入総額の1%余~3%にとどまる<sup>12)</sup>。また、「台湾」と並ぶ内地への米供給地である「朝鮮」の飲食物輸出は「水産物」の3.4%(S12)にとどまり、米に特化した食料輸出という形態が認められる<sup>13)</sup>。一方の輸入も「水産物」「精糖」「水飴及菓子」のそれぞれ1%前後にとどまる。加えて「満洲国」も「大豆」やその加工品である「大豆粕」や「大豆油」の輸出は大きいものの<sup>14)</sup>、飲食物に関してはわずかに「其他ノ飲食物」が1%余にとどまる。また、輸入に関しては「其他ノ飲食物」の4%余につき「砂糖」と「水産物」が2~3%程度などとなる。「内地」を軸とした穀物貿易を別とすれば「台湾」の「砂糖」が突出していることを指摘できる他、一定量の多様な食品がやり取りされていることも確認できる。

次節では以上の詳細を検討したい。

### 3. 各国・地域の品目別貿易相手

本章では各巻ごとに主要貿易品目とその貿易相手について検討する。基本的には第3表に示す当該国の総輸出額の1%を超える品目の輸出入量に着目した。各国の通貨単位相互の比較が簡単ではなく、輸出入量を示す方がより直接的な比較が可能と考えたためである。しかし、輸出入量の記載がないものや部分的なものについては輸出入額を示すものとした。

### 3.1 「泰国」

「泰国」の輸出の主力は鹹魚，輸入の主力は「ミルク」「精糖」「煙草」「葉煙草」「其他ノ蔬菜」となる。このうち「鹹魚」320,755擔<sup>5)</sup> (S12)，441,802擔 (S13)のうち249,515擔 (S12)，369,216擔

(S13)を占める最大の輸出先が「新嘉坡(シンガポール)」である。これに次ぐのが「香港」の53,619擔 (S12)，44,237擔 (S13)となり，これらで「泰国」の「鹹魚」輸出のほとんどを占める。

主要な輸入食料の「ミルク」はS12年に11,606トン，S13年に10,905トンで，そのほとんどが「コンデンスミルク」で，S12年が9,976トン，S13年が9,346トンを占める。輸入相手国は「和蘭(オランダ)」3,867トン (S12)，3,859トン (S13)，「瑞西(スイス)」が3,467 (S12)，3,210 (S12)，「米国」が1,793トン (S12)，1,272 (S13)トンなどとなり，欧米から相当量の「コンデンスミルク」を輸入していたことがうかがえる。一方，「精糖」36,208トン

(S12)，34,429トン (S13)のうち「蘭領印度」<sup>16)</sup>からが22,575トン (S12)，23,355トン (S13)を占め，最大の貿易相手となる。これに次ぐのが5,000万トン前後の「香港」「ペナン」などである。次にタバコ類であるが，「葉煙草」2,490トン (S12)，1,899トン (S13)，「煙草」1,449トン (S12)，1,045トン (S13)であり，うち「葉煙草」では「米国」からが1,591トン (S12)，1,510トン (S13)とその大部分を占め，「煙草」では「英吉利(イギリス)」が1,278トン (S12)，910トン (S13)とその大部分を占める。最後に「其他ノ蔬菜」の輸入量は14,539トン (S12)，16,483トン (S13)で，「生鮮」と「乾燥」が概ね半量づつとなっている。主要相手先は「中華民国」が4,732トン (S12)，6010トン (S13)，「香港」が4,767トン (S12)，5,897トン (S13)，「新嘉坡」が2,354トン (S12)，2,605トン (S13)などとなる。

一大米輸出国の同国であるが，アジアへの「水産物」輸出と「蘭領印度」からの「精糖」輸入が認められた。また，欧米からのタバコやミルクの輸入も一定程度に上る。

### 3.2 「中華民國北支那」

輸出の主力は卵製品，これに煙草や胡桃，塩，獸腸が続き，輸入では精糖が首位で水産物がそれに続く。まず，卵製品の輸出先であるが，15.9百万国幣元のう

ち約半分の7.7百万国幣元 (S13)を「英吉利」に仕向けている。同様に26.0百万国幣元のうち12.6百万国幣元 (S14)，41.0百万国幣元のうち27.0百万国幣元 (S15)が「英吉利」向けである。これに「ドイツ」の5.8百万国幣元 (S13)，8.7百万国幣元 (S14)，1.8百万国幣元 (S15)，「米国」の2.4百万国幣元 (S14)，5.8百万国幣元 (S15)，「関東州」の5.8百万国幣元 (S15)などが続く。イギリスを中心とした欧米向けの輸出品といえる<sup>17) 18)</sup>。一方，煙草は5.0百万国幣元 (S13)，4.2百万国幣元 (S14)と推移するがその後7百万国幣元 (S15)と輸出は急減する。輸出先は「日本」向けが1.7百万国幣元 (S13)，「関東州」向けが3.2百万国幣元 (S13)，4.0百万国幣元 (S14)であり，ほとんどを日本とその影響圏，いわゆる「日満支ブロック」に仕向けられているといえる。これに次ぐ胡桃は2.1百万国幣元 (S13)，3.0百万国幣元 (S14)，5.0百万国幣元 (S15)の輸出額があり，主な輸出先は「加奈陀」に1.2百万国幣元 (S14)，2.4百万国幣元 (S15)，「米国」に0.8百万国幣元 (S13)，1.1百万国幣元 (S14)，2.2百万国幣元 (S15)と北米が中心となる。また，塩は5.98百万キントル (S13)，3.67百万キントル (S14)，5.24百万キントル (S14)の輸出量を持ち，ほぼ全量に近い5.97百万キントル (S13)3.39百万キントル (S14)，5.16百万キントル (S15)が日本向けとなっている。最後に獸腸(羊・豚)は5.666キントル (S13)，6.683キントル (S14)，3.271キントル (S14)の輸出があり，「米国」向けに1.637キントル (S13)，1.586キントル (S14)，1.545キントル (S15)，「ドイツ」向けに1,580キントル (S13)，2,612キントル (S14)，「フランス」向けに1,072キントル (S13)，1,168キントル (S14)，「関東州」向けに1,014キントル (S15)などとなり，これも欧米向けの食品輸出である。このように，煙草と塩のように日本向けを中心とした貿易品目と胡桃や獸腸のように主に欧米向けの品目に分けられる。

これに対し，輸入品の首位の精糖は583千キントル (S13)，1,602千キントル (S14)，629千キントル (S15)の貿易量があり，「日本」からの輸入が358千キントル (S13)，743千キントル (S14)，134千キントル (S15)，「台湾」のものが762千キントル (S14)，257千キントル (S15)，「蘭領印度」が107千キントル (S13)，「香港」が134千キントル (S15)となり，日本が中心となる。これに次ぐ水産

物は1.8百万金元 (S13), 4.0百万金元 (S14), 8.0百万金元 (S15) の輸入があり<sup>19)</sup>, 1.6百万金元 (S13), 3.3百万金元 (S14), 6.5百万金元 (S15) と大部分が「日本」からのものとなる。内訳では鮮魚介や乾魚介, 塩魚などを抑えて昆布及海苔の占める割合が多いことも付記しておきたい。同様に, 「缶詰詰食料品」の昭和15年の輸入額は4.43百万金元で9割以上を「日本」が占めていると思われる<sup>20)</sup>。煙草の昭和13年の輸入額は1.5百万金元で, 1.2百万金元が「米国」で8割以上を占める。このように輸出では欧米向けも認められたが, 輸入では日本が中心となっている。

### 3.3 「中華民国総覽」

輸出の主力は「卵製品」で45百万国幣元 (S12), 43百万国幣元 (S13), 72百万国幣元 (S14), 120百万国幣元 (S15) と期間中にも大きな伸びを示す。輸出先は「英吉利」が年度順に27百万国幣元, 23百万国幣元, 45百万国幣元, 94百万国幣元で首位となる。「ドイツ」が同様に7百万国幣元, 14百万国幣元, 15百万国幣元, 2百万国幣元, 「米国」が同様に7百万国幣元, 百万国幣元, 5百万国幣元, 10百万国幣元などとなり, 「北支那」同様に欧米への輸出が中心である。これに次ぐ「卵」は「卵製品」に比べ, 8百万国幣元 (S12), 6百万国幣元 (S13), 10百万国幣元 (S14), 13百万国幣元 (S15) と輸出額は大きく下回るものの, 総輸出額の1%程度を占める主要品目である。輸出量は386百万個 (S12), 235百万個 (S13), 263百万個 (S14), 182百万個 (S15) となる。「英吉利」向けが年度順に119百万個, 30百万個, 66百万個, 101百万個, 「香港」向けが同様に97百万個, 81百万個, 84百万個, 37百万個, 「ドイツ」向けが同様に120百万個, 92百万個, 48百万個などとなる<sup>21)</sup>。「卵製品」同様に欧米向けである。一方, 「茶」は407千キントル (S12) 416千キントル (S13) 226千キントル (S14) 345千キントル (S15) の輸出量があり, 輸出先は「香港」が年度順に42千キントル, 239千キントル, 118千キントル, 235千キントルと, 昭和12年を除きその大部分を占める。「煙草」も同様に9.3百万国幣元 (S12), 9.7百万国幣元 (S13), 9.8百万国幣元 (S14), 6.8百万国幣元 (S15) で<sup>22)</sup>, 「関東州」向けが年度順に3.7百万国幣元, 3.5百万国幣元, 4.0百万国幣元, 0.1百万国幣元, 「香港」向けは同様に1.8百万国幣元, 2.2百万国幣元, 1.8百万国幣

元, 2.3百万国幣元などとなりアジアを中心とした輸出である。これに次ぐ「獸腸」は28千キントル (S12), 18千キントル (S13), 19千キントル (S14), 12千キントル, (S12) の輸出量があり, 「米国」向けが年度順に6千キントル, 2千キントル, 4千キントル, 4千キントル, 「フランス」が同様に6千キントル, 4千キントル, 3千キントル<sup>23)</sup>, 「和蘭 (オランダ)」が同様に, 5千キントル, 3千キントル, 3千キントル, 「ドイツ」が同様に5千キントル, 3千キントル, 5千キントル, 千キントルなどとなり, 欧米向け品目となる。最後に「其他ノ鮮乾塩蔬菜」は10.5百万国幣元 (S12), 9.8百万国幣元 (S13), 11.0百万国幣元 (S14), 17.0百万国幣元 (S15) の輸出額があり, 首位の輸出先は「香港」で年度順に6.1百万国幣元, 5.6百万国幣元, 4.2百万国幣元, 9.7百万国幣元となる。ほかに「海峡植民地」向けが同様に1.3百万国幣元, 1.4百万国幣元, 1.5百万国幣元, 2.6百万国幣元などとなり, アジア向け品目である。以上のように輸出においては「卵」や「卵製品」「獸腸」などの畜産品が欧米向け, 「茶」や「煙草」「蔬菜」などはアジア向けといえることができる。

輸入については「精糖」と「煙草」が二大品目でこれに「水産物」が続く。「精糖」の輸入量は1.6百万キントル (S12), 1.0百万キントル (S13), 2.3百万キントル (S14), 1.6百万キントル (S15) となり, 主要貿易相手は「日本」が0.6百万キントル (S12), 0.4百万キントル (S13), 0.8百万キントル (S14), 0.2百万キントル (S15), 台湾が0.2百万キントル (S12), 0.7百万キントル (S14), 0.5百万キントル (S15), 「蘭領印度」が0.5百万キントル (S12), 0.3百万キントル (S13), 0.2百万キントル (S14), 0.6百万キントル (S15), 「香港」が0.3百万キントル (S12), 0.3百万キントル (S13), 0.2百万キントル (S14), 0.3百万キントル (S15) などである。主にアジア圏内からの輸入が主となる。一方の「煙草」輸入は9.6百万金元 (S12), 9.8百万金元 (S13), 15.0百万金元 (S13), 18.2百万金元 (S15) となる。主たる相手国は「米国」で, 輸入額は8.6百万金元 (S12), 8.7百万金元 (S13), 9.7百万金元 (S14), 13.6百万金元 (S15) となり, ほとんどが「米国」からの輸入となる。これらに次ぐ「水産物」は5.8百万金元 (S12), 4.3百万金元 (S13), 6.7百万金元 (S14), 11.7百万金元 (S15) の輸入があり。主たる相手国は「日本」で3.2百万金元 (S12), 2.0



百万金元 (S13), 4.3百万金元 (S14), 8.0百万金元 (S15) となり, 多くが「日本」からの輸入となる。輸入においても「精糖」や「水産物」を中心としたアジア貿易と「煙草」を中心とした欧米貿易が交錯している。

### 3.4 「比律賓」

主要輸出品は輸出総額の3~4割を占める「砂糖」である。輸出量は昭和12年に871.0千トン, 昭和13年に868.2千トンで, ほぼ全量の868.0千トン, 867.9千トン「米国」に仕向けている。これに続くのが「煙草」で輸出額は10.0百万ペソ (S12), 9.7百万ペソ (S13)<sup>24)</sup> 同様に, 6.6百万ペソ (S12), 6.3百万ペソ (S13) が「米国」が米国に仕向けられる。「鳳梨 (缶詰)」は11.0千トン (S12), 2.1千トン (S13) の輸出量があり, 昭和12年には全量が「米国」に輸出されている<sup>25)</sup>。

輸入の主力は「煙草」「ミルク」「缶詰食料品」であり, 「煙草」の輸入額は7.3百万ペソ (S12), 15.9百万ペソ (S13) で, 輸出額と遜色のない輸入額を有している。相手国も同様に「米国」が7.2百万ペソ (S12), 15.8百万ペソ (S13) とほぼ全量を占めている。一方, 「ミルク」は20.1千トン (S12), 23.3千トン (S13) の輸入量があり, 「和蘭」から11.4千トン (S13), 14.8千トン (S13), 「米国」から5.9千トン (S12), 6.6千トン (S13) となり, 「和蘭」が首位となる。「缶詰食料品」は19.5千トン (S12), 18.8千トン (S13) の輸入があり, 両年次共にそのおよそ4分の3が「魚類」である。相手国は「日本」が11.1千トン (S12) 7.6千トン (S13), 「米国」が6.6千トン (S12), 9.0千トン (S13) となる。

以上のように「比律賓」の食品貿易は基本的に「米国」を軸として展開している。

### 3.5 「東印度諸島」

食料生産を犠牲にした一次産品の貿易依存 (増田2004) という状況にあった当地の主要輸出品は「砂糖」「茶」「煙草」「コーヒー」となる。「砂糖」の輸出量は昭和10年に1,140千トン, 昭和14年に1,679千トンにのぼる。主要輸出先はそれぞれ年次順に「印度」304千トン, 342千トン, 「英吉利」に315千トン, 182千トン, 「香港」に159千トン, 117千トンとなり, これに単年度で「日本」に152千トン (S10),

「埃及 (エジプト)」に199千トン (S14), 「和蘭」に140千トン (S14) が加わる。「比律賓」の砂糖が主として「米国」向けであったのに対し, 当地の「砂糖」は宗主国の「和蘭」のみならず, 「英吉利」本国のみならず「印度」や「香港」などの自治領, 植民地を含む「英帝国ブロック」やアフリカにも広く輸出されていたことが指摘できる。次に「茶 (葉茶)」の輸出量は昭和10年に67千トン, 昭和14年に81千トンとなる<sup>26)</sup>。輸出先はそれぞれ年次順に「和蘭」に16千トン, 16千トン, 「英吉利」に16千トン, 5千トン, 「濠州」に14千トン, 19千トン, 「米国」に8千トン, 15千トンなどとなり, 欧米向けが中心となり, 砂糖とは異なるパターンを示す。同様に, 「煙草」の輸出量は昭和10年に51千トン, 昭和14年に35千トンとなり, その輸出先は「和蘭」が中心で昭和10年に45千トン, 昭和14年に33千トンとなり, 他には「西班牙 (スペイン)」に3千トン (S10), 1千トン (S14) などである。また, 「コーヒー」も昭和10年に83千トン, 67千トンの輸出量があり, 年次順にそれぞれ「フランス」に25千トン, 8千トン, 「和蘭」に15千トン, 13千トンなどヨーロッパ向けに中心となる<sup>27)</sup>。「砂糖」はオランダのみならずイギリス, またアジアやアフリカなどにも輸出される一方, それ以外の品目は主として欧米向けといえる。

一方の主要な輸入「飲食物」は「水産物」「煙草」「酒類」「薬味及調味料」「ミルク及同製品 (コンデンスミルク)」である。「水産物」の輸入量は昭和10年に54.7千トン, 昭和14年に64.8千トンで, そのほとんどが「乾塩燻魚」である。最大の貿易相手は「昭南<sup>28)</sup>」で51.7千トン (S10), 60.2千トン (S14) を占める。次に「煙草」は昭和10年に5.8千トン, 昭和14年に8.3千トンで, うち「刻煙草」が4.4千トン

(S10), 5.2千トン (S14) を占める。輸入先は年次順に「英吉利」が3.1千トン, 3.4千トン, 「和蘭」が1.1千トン, 2.0千トン, 「米国」が0.5千トン, 1.9千トンなどで欧米が中心となる。また, 「酒類」は昭和10年に6.5千キロリットル, 昭和14年に6.2千キロリットルで, 量的にはその半量を「麦酒」がしめ, 「葡萄酒」や「蒸留酒」が続く。輸入先は年次順に「和蘭」が2.8千キロリットル, 1.9千キロリットル, 「獨逸」が1.0千キロリットル, 0.7千キロリットルなどヨーロッパが中心である。さらに, 「薬味及調味料」は昭和10年に10.2千トン, 昭和14年に14.2千トンの輸入があり, 主要国は各々年次順に「英領阿弗利加」が3.9

千トン、6.3千トン、「昭南」3.1千トン、1.5千トン、「マダガスカル及リユニオン」が0.6千トン、2.5千トンとなる。アフリカからの輸入が多い。最後に「ミルク及同製品（コンデンスミルク）」で、昭和10年に12.7千トン、昭和14年に17.9千トンの輸入がある<sup>29)</sup>。輸入先は同様に「和蘭」9.0千トン、15.2千トン、「昭南」が1.3千トン、0.8千トン、「丁抹」が0.9千トン、0.7千トンなどとなる。水産物や葉味及び調味料ではアジアとの貿易、タバコや酒類、ミルクでは欧米との貿易という傾向がみられる。また、輸出入ともに総じて宗主国のオランダを中心とした構図が認められる。

### 3.6 「仏領印度支那」

主要輸出品は「生乾塩燻魚介類」と「鳥卵」である。前者の輸出量は32.9千トン（S12）、34.3千トン（S13）35.1千トン（S14）、後者は同様に4.8千トン、8.0千トン、9.1千トンとなる。主な輸出先は前者では「昭南」が20.9千トン、22.6千トン、24.9千トンで大半を占め（いずれも年次順）、これに「香港」4.9千トン、6.3千トン、6.3千トンが続く。後者では「昭南」が3.5千トン、5.1千トン、5.6千トン、「香港」が1.2千トン、3.0千トン、2.9千トンなどとなり、いずれも「昭南」「香港」向けが中心である。

主要輸入品には「酒類（葡萄酒）」「ミルク及同製品」「紙巻煙草」「乾果実（檳榔子）」が連なる。

「酒類（葡萄酒）」は昭和12年に9.7千トン、昭和13年に9.9千トン、昭和14年に10.2千トンの輸入量がある。輸入先は年次順に「仏蘭西（フランス）」が5.0千トン、4.8千トン、4.3千トン、「アルジェリア」が4.4千トン、5.0千トン、4.6千トンとなりフランスブロックからの輸入がほとんどである。「ミルク及同製品」には「主トシテコンデンスミルク」と注記されており、輸入量は4.9千トン（S12）、5.1千トン

（S13）、4.9千トン（S14）となる。輸入先は年次順に「和蘭」2.0千トン、2.8千トン、2.8千トン、「瑞西」0.6千トン、1.5千トン、1.5千トン、「仏蘭西」1.4千トン（S12）などとなり、主としてヨーロッパである。「紙巻煙草」の輸入量は2.1千トン（S12）、2.5千トン（S13）、2.1千トン（S14）であり、輸入先は年次順に「アルジェリア」から1.8千トン、2.3千トン、1.9千トンで、8割近くを占める。最後に「檳榔子」の輸入量は昭和12年に2.71千トン、昭和13年に2.75千トン、昭和14年に2.35千トンとなる。輸入先は

ほとんどが「昭南」で年次順に2.67千トン、2.74千トン、2.15千トンとなる。

酒類やミルク、タバコなどの輸入では植民地のアルジェリアを含む宗主国フランスを軸とした貿易が展開されるものの、「水産物」や「鳥卵」の輸出では「昭南」、「香港」などのアジアが主となる。また、輸入においても檳榔子はアジアである。

### 3.7 「ビルマ」

有数の米輸出を誇る一方で、総輸出額の1%を超える「飲食物」は存在しない。主要輸入品は「煙草」

「ミルク及同加工品」「水産物（乾塩魚）」「茶（紅茶）」「酒類」「玉葱」である。まず、「煙草」の輸入量は昭和12年に16.7百万ポンド、昭和13年に17.1百万ポンドである。量的にはうち14.3百万ポンド

（S12）、14.7百万ポンド（S13）を「葉煙草」が占めるものの、金額的には輸入額8.8百万ルピーのうち5.7百万ルピー（S12）、8.9百万ルピーのうち5.4百万ルピー（S13）を「紙巻煙草」が占める。輸入量のほとんどを占めるのが「印度」で16.6百万ポンド

（S12）、17.0百万ポンド（S13）となる。なお、金額的にも同様に8.5百万ルピー（S12）、8.4百万ルピーを「印度」が占める。次に「ミルク及同加工品」の輸入量は昭和12年に202千cwt<sup>30)</sup>、昭和13年に185千cwtで、主要輸入先は「和蘭」が174千cwt（S12）、164千cwt（S13）とその大半を占める。また、「水産物（乾塩魚）」の輸入量は昭和12年に169千cwt、昭和13年に161千cwtで、主要輸入先は「印度」が118千cwt

（S12）、105千cwt（S13）、「旧海峡植民地」が49千cwt（S12）、54千cwt（S13）である。次に、「茶（紅茶）」の輸入量は昭和12年に7.8百万ポンド、昭和13年に2.0百万ポンドで、主要輸入先はここでも「印度」で、7.7百万ポンド（S12）、1.9百万ポンド

（S13）とほぼその全量を占める。同様に「酒類」の輸入量は昭和12年に576千Lガロン、昭和13年に539千Lガロンで、主要輸入先は年次順に「英吉利」が285千Lガロン、312千Lガロン、「獨逸（ドイツ）」が120千Lガロン、102千Lガロンなどとなる。最後に「玉葱」の輸入量は昭和13年に499千cwtで、ほぼ全量の499千cwtを「印度」から輸入する。

総じて、インドからの輸入が大きな位置を占めるものの、宗主国のイギリスをはじめとしたヨーロッパとの貿易も認められる。

### 3.8 「大日本帝国内地」

荒木（2023）では「大日本帝国内地」は米の一大需要地であると共に小麦の一大供給地でもあり、帝国の領域内に穀物貿易圏を構築していた。それ以外の食料品である「飲食物」における主な輸出品目は「缶詰詰食料品」と「水産物」である。

「缶詰詰食料品」の輸出額は昭和12年に97.0百万円、昭和13年に106.7百万円である<sup>31)</sup>。主要輸出先は年次順に「英吉利」が29.5百万円、40.8百万円、「米国」が21.9百万円、12.2百万円、「台湾」が6.5百万円、9.0百万円、「関東州」が3.9百万円、7.2百万円、「朝鮮」が2.9百万円、4.9百万円、「比律賓」が3.8百万円、1.6百万円、「中華民国」が0.9百万円、9.9百万円、「ベルギー及ルクセンブルグ」が3.9百万円、2.3百万円、「フランス」が2.7百万円、1.7百万円、「濠州」が2.5百万円、2.5百万円、「布哇（ハワイ）」が1.8百万円、1.7百万円、「オランダ」が1.6百万円、1.0百万円など、英米を中心にアジア各地、ヨーロッパ各地に仕向けられている<sup>32)</sup>。一方の水産物の輸出額は昭和12年に37.0百万円、昭和13年に39.3百万円である。主要輸出先は年次順に「関東州」が7.4百万円、9.2百万円、「台湾」が7.8百万円、8.5百万円、「朝鮮」が7.2百万円、8.9百万円、「中華民国」が3.4百万円、6.6百万円、「米国」が4.0百万円、3.4百万円となり、こちらはいわゆる「日満支圏」で72%（S12）87%（S13）を占める。

一方の輸入飲食物の主は「砂糖」で、昭和12年に18.4億斤、昭和13年に15.3億斤の輸入があり、そのうち「台湾」からの輸入量が各年14.6億斤、14.6億斤と大半を占める。

このようにいわゆる「日満支圏」を中心とした食品貿易（水産物輸出や砂糖輸入）を軸としつつ、加工食品では欧米向けにも多くの輸出を行っていたことが認められる。

### 3.9 「台湾」

米の一大供給地であるとともに砂糖の供給地であったことも知られている。同年表でも「砂糖」「芭実」「茶」「鳳梨缶詰」「切乾薯」が主要輸出品となっている。「砂糖」の輸出は台湾の総輸出額の4割以上で、輸出量は昭和12年に15.3億斤、昭和13年に16.6億斤にのぼる。輸出のほとんどは「日本」で両年次共に14.6億斤に達し、「日満支圏」で99～100%を占める。これに次ぐ「芭実」の輸出量は昭和12年に44.4百

万斤、昭和13年に34.1百万斤で、主な輸出先は年次順に「日本」に19.7百万斤、17.0百万斤、「中華民国」に12.0百万斤、7.0百万斤、「関東州」に6.9百万斤、5.8百万斤、「満洲国」に5.5百万斤、4.2百万斤などとなる。「砂糖」同様に「日満支圏」で99～100%を占める。一方、「茶」の輸出量は昭和12年に17.1百万斤、昭和13年に17.9百万斤で、その半量を「紅茶」、残りが「包種茶」と「烏龍茶」となる。主要輸出先は年次順に「米国」に6.3百万斤、4.8百万斤<sup>33)</sup>、「関東州」に1.5百万斤、4.8百万斤、「満洲国」に0.8百万斤、2.5百万斤、「日本」に1.3百万斤、1.9百万斤、「英吉利」に1.1百万斤、1.3百万斤などとなり、茶では「日満支圏」のみならず、相当量が欧米に仕向けられている。また、「鳳梨缶詰」の輸出額は昭和12年に9.2百万円、昭和13年に10.4百万円で、主要輸出先は7.1百万円（S12）、8.1百万円（S13）を占める「日本」である。「日満支圏」で89.5%（S12）、99.7%（S13）を占め、「砂糖」などと同様のパターンを示す。最後に「切乾薯」の輸出量は昭和13年に4.1億斤を擁し、うち2.6億斤を「日本」に、1.5億斤を「朝鮮」に仕向け、「日満支圏」でほぼ全量を占める。このように日本を中心とした「日満支圏」向けの輸出が中心となるものの、「茶」ではアメリカ向けも認められた。

一方の輸入品の主力は「煙草」「乾魚介」「塩魚」「清酒」「味ノ素類」「缶詰食料品」「麦酒」「菓子類」である。まず、「煙草」の輸入額は昭和12年に10百万円、昭和13年に7.9百万円となり、輸入先は「日本」が9.0百万円（S12）、7.7百万円（S13）とその大部分を占める。これに次ぐ「乾魚介」の輸入量は昭和12年に13.8百万斤、昭和13年に13.0百万斤で、輸入先は「日本」が大部分を占め、12.4百万斤（S12）、12.4百万斤（S13）となる。「塩魚」も同様に昭和12年に36.6百万斤、昭和13年に32.0百万斤の輸入量のうち、「日本」が28.4百万斤（S12）、27.9百万斤（S13）とその多くを占める。さらに「清酒」の輸入量においても昭和12年の17.7千石、昭和13年の26.1千石の全量が「日本」からであり、「麦酒」の輸入量においても昭和12年の144.8千箱、昭和13年の187.0千箱の全量が「日本」からである。また、「味ノ素類」の輸入額においても昭和12年の3.6百万円、昭和13年の4.0百万円のほぼ全量が「日本」からとなる<sup>34)</sup>。「缶詰食料品」の輸入額は昭和12年に2.96百万円、昭和13年に5.02百万円であり、うち2.92百万円（S12）、

4.95百万円（S13）を「日本」が占める。また、昭和12年の「菓子類」の輸入額2.605百万円、昭和13年の同3.287百万円のうち、「日本」が各々2.604百万円、3.286百万円を占め、主要食料品輸入の多くが日本を中心とした枠組みで完結している。

### 3.10 「朝鮮」

「朝鮮」は「台湾」を凌ぐ「大日本帝国内地」への米供給地であったが、米以外の飲食物の貿易は限定的である。

輸出の主力は「水産物」で、昭和12年に23.0百万円、昭和13年に30.6百万円の輸出額がある<sup>35)</sup>。その大半は「日本」向けで、輸出額は17.5百万円

（S12）、23.0百万円（S13）にのぼり、これに「満洲国」の3.8百万円（S12）、6.0百万円（S13）などが続き、「日満支圏」で99.9%超とほぼ全量を占める。

一方の輸入の主力は「水産物」と「精糖」「水飴及菓子」で、「水産物」輸入は昭和12年に9.8百万円、昭和13年に12.0百万円となる。輸入先の中心は輸出同様に「日本」で、輸入額は7.2百万円（S12）、8.9百万円（S13）とその大半を占め、それに続くのが年次順に「中華民国」の0.9百万円、1.4百万円、「関東州」の0.8百万円、1.3百万円となる。「日満支圏」で9割以上を占める。「精糖」の輸入量は昭和12年に104.0百万斤、昭和13年に83.5百万斤で、首位の輸入先は「台湾」の33.5百万斤（S12）、61.3百万斤（S13）で、これに「日本」の13.3百万斤（S12）、12.2百万斤（S13）が続く。「水飴及菓子」の輸入額は昭和12年に7.925百万円、昭和13年に11.468百万円で、首位の「日本」がそれぞれ7.921百万円、11.463百万円とほぼ全量を占める。

このように「朝鮮」の食品貿易は「大日本帝国」あるいは「日満支圏」の枠組みで展開していた。

### 3.11 「満洲国」

穀物輸出では「大豆」が「満洲国」の主力<sup>36)</sup>を占めるが、「飲食物」の輸出では「其他ノ飲食物」のみがそ運輸出額の1%を超え、輸出額は7.2百万円

（S12）、8.6百万円（S13）、11.4百万円（S14）となる。「其他」のカテゴリーのため、詳細はわからないが、青果物や魚介類、肉類、乳製品、乾麺類、醤油、酒類、煙草以外の飲食物であることが統計表から読み取れる。主要輸出先は「日本」で、6.6百万円

（S12）、7.1百万円（S13）、9.9百万円（S14）、そ

れに次ぐのが「朝鮮」で同様に0.6百万円、1.1百万円、1.2百万円となる。これはそれ以外の「飲食物」についてもいえることであるが、同国の輸出先はほとんどがいわゆる「日満支圏」で完結する。

一方、主な輸入品は「其他ノ飲食物」「砂糖」「水産物」「缶詰壺詰食料品」「果実である。「其他ノ飲食物」は55.0百万円（S13）、77.4百万円（S14）で、同様に詳細はわからないが青果物、茶やコーヒー、砂糖、水産物、寒天、肉類、乳製品、調味料、乾麺類、酒類、煙草などを除く品目となる。主要輸入先は年次順に「日本」が46.1百万円、58.2百万円、「朝鮮」が3.6百万円、2.2百万円となり、いわゆる「日満支圏」で96.7%（S13）、91.3%（S14）を占める。それ以外では「濠州」が1.5百万円（S12）、1.6百万円（S13）が目立つ程度である。これつに次ぐ「砂糖」の輸入は昭和13年に233千トン、昭和14年に184千トンとなっており、主要輸入先は年次順に「日本」が176千トン、99千トン、「台湾」が40千トン、69千トンなどとなり、いわゆる「日満支圏」で99%程度を占める。また、「水産物」輸入は昭和13年に22.1百万円、昭和14年に56.1百万円となる。主要輸入先は同様に「日本」が16.1百万円、42.6百万円、「朝鮮」が5.5百万円、12.1百万円となり、同様に「日満支圏」で99%以上を占める。「缶詰壺詰食料品」においても昭和14年の輸入量である46.7千トンのうち43.9千トンが「日本」からというようにここでも「日満支圏」で99%以上をしめる。昭和14年の「果実」の輸入量104.6千トンのうち、「日本」からが70.1千トン、「台湾」からが20.5千トン、「朝鮮」からが8.3千トン、「中華民国」からが5.7千トンと「日満支圏」で全量を占める。なお、輸入「果実」のおよそ半量を占めるのが「蜜柑」で、45.6千トンとなる。

このように、「飲食物」の貿易は「日本」を中心とした「日満支圏」の枠内でほぼ完結しているといえるが、量的には少なからぬ量の食品がやり取りされていることがうかがえる。その多くが酒や煙草などの嗜好品ではなく、水産物や缶詰類などの日々の食生活を支える食品であったことを指摘できる。

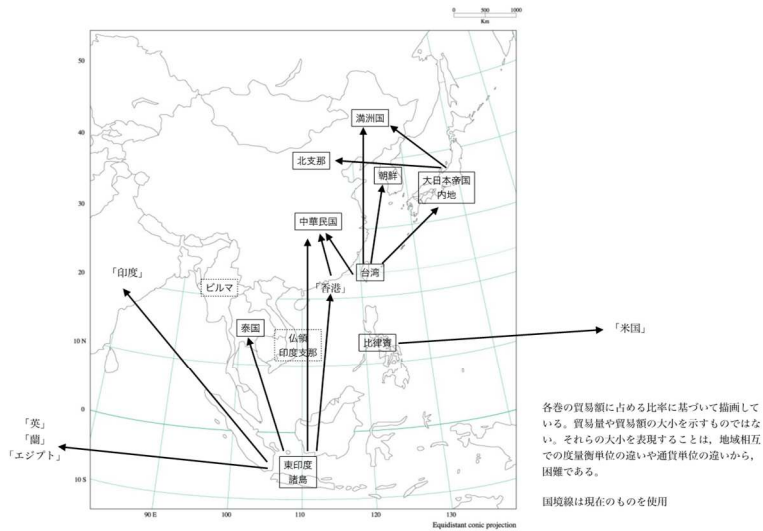
## 4. おわりに

以上の各国・地域の状況から、1930年代後半の東アジアの多国（多地域）間の食品（飲食物）貿易がどのようなものだったのかを論じたい。第1～5図は上述

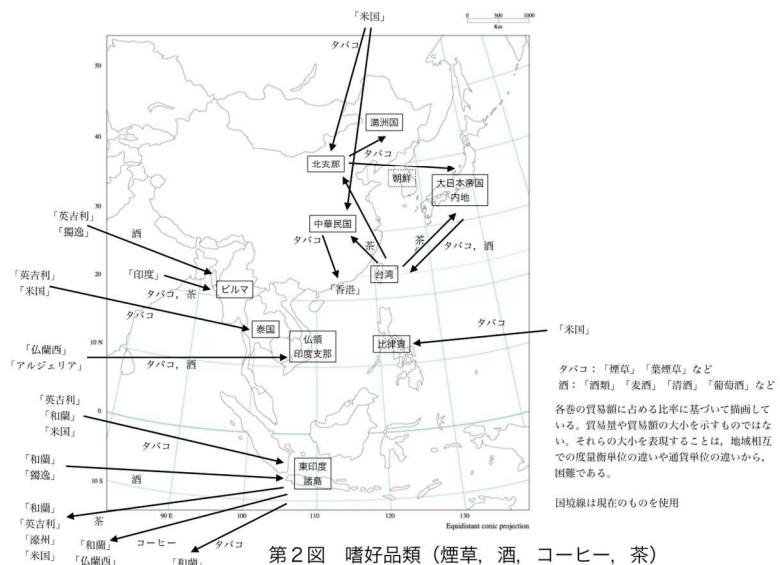
の国・地域の主要貿易品目とその貿易相手を示したものであり、多国（多地域）間相互の貿易パターンとして描き出すことができた。

まず、東アジアの多国（多地域）間「飲食物」貿易の特徴として、砂糖を軸とした輸出に特化した「比律賓」や「台湾」の存在をあげることができる。また、砂糖や茶を軸とした「東印度諸島」、「卵製品」を軸とした「中華民国」も総輸出額において一定の比率を「飲食物」が占めていた。一方で輸入に関しては各

国・地域ともにおおむね総輸入額の10%内外という傾向がみられた。これは上記の「比律賓」や「台湾」などの「飲食物」輸出国だけでなく、米輸出に特化していた「泰国」や「ビルマ」「朝鮮」においても同様で、大量の米や砂糖などの輸出国も、一方で輸入額の1から2割を食物の輸入に充当していた。また、品目に着目すると上記の砂糖や茶などのいわゆる商品作目輸出は特定の品目に特化して大きな貿易量を有する一方で、それら以外の品目の輸出品量は決して多くはない



第1図 砂糖類



第2図 嗜好品類（煙草、酒、コーヒー、茶）





る外貨獲得上の有力な商品作物<sup>38)</sup>をのぞいた水産物や青果物、あるいは缶詰や菓子などのいくばくかの加工食品など、多様な日常的食品群において、アジア間貿易は確かに機能していたとすることができる。今次は貿易総額に占める比率の分析であったが。今後は度量衡や通貨単位の換算というやや複雑な課題があるものの、それらの貿易額や貿易量での評価を試みたい。

最後に、アジア間貿易の卓越する品目と欧米とアジアを結ぶ貿易の卓越する品目が認められた背景として以下を指摘できる。一つには輸送距離の違いであり、大陸間のような遠距離の食品輸送にはコストがかかる。貿易品目にはそれを補う高価格商品であることや、高付加価値商品であることが求められる。前者における嗜好品や畜産品それに当たる。一方で、アジア間で主体となる青果物などは前者のそれよりは一般的に廉価といえる品目である。また、それと関連して、保存加工のできる商品が遠距離輸送に適しているともいえる。欧米から供給される酒類やタバコ、あるいはコンデンスミルクはそれにあたる。一方で、アジア間で多くみられた鮮魚などは遠距離輸送には向かない。こうした技術的側面に加えて、食文化の類似性という観点からの説明も可能かもしれないが、あくまでも貿易品を前提とした検討であり、軽々に文化的背景との因果関係を結論づけることには慎重でありたい。むしろ、食文化の流通と政治的な支配・非支配という側面からの検討が待たれる。

## 付記

基本的に本論では旧字体表記は新字体で表記した。典拠とした「大東亜共栄圏総合貿易年表」も当然旧字体表記で記載されているが、煩雑さを避けるため文中では「國」を「国」、「佛」を「仏」など新字体に置き換えた。また、典拠資料に基づいて国や地域に言及する場合は「泰国」「仏領印度支那」などのように鉤括弧を付し、典拠資料に基づかずに一般的な国や地域を指す場合には単にタイやフランス領インドシナ、あるいはベトナムなどのような通常の表記とした。また、典拠資料においても「大日本帝国内地」と「日本」、「泰国」と「泰」、「ビルマ」と「緬甸」、「東印度諸島」と「蘭領印度」など表記のゆらぎがある。基本的には典拠資料の表記に従い、必要に応じて注記を加えている。「中華民国総覧」と「中華民国北支那」はそれぞれ「中華民国」「北支那」と略記している箇所がある。

同様に品目名称も典拠資料に基づいて言及する際には鉤括弧を付し、それによらない場合は鉤括弧をもちいていない。例えば、典拠資料に基づく場合は「煙草」「葉煙草」などとしたが、一般的な名詞として使う場合は通常の表記でタバコとしている。

また、典拠資料が元号（昭和）表記となっているため、資料に言及する際には元号で示した。ただし、一般的な記述においては西暦を用いた。加えて、一般的には植民地との貿易は輸出入ではなく、移出入と区別されるが、本論では煩雑さを避けるため全て輸出入としている。さらに典拠資料各巻は国家単位のものもあり、植民地の単位のものもある。このため、「各国・各地域」と記載するのが正確ともいえるが、煩雑さを避けるため、単に「各国」としている箇所がある。

図表類はいずれも『大東亜共栄圏総合貿易年表』各巻の数値をもとに作成したものである。

## 注

- 1) ここでは東南アジア、東北アジアをあわせて東アジアとした。また、ここでいう食品は典拠とした資料に「飲食物」として分類される品目を指し、後述のように穀物類は含まない。特に典拠資料に依拠して使う場合は鉤括弧を付した「飲食物」と表記した。
- 2) これに加えて『第10巻 マライ』とする資料も存在するが、確認できていない。
- 3) 貿易統計の不整合問題は現在でも存在する（小坂他 2012）。完全な一致や整合は困難であるとしても、そうした国によって異なる分類に整合性を持たせる取り組みを行い、一応の成果を得たのが「大東亜共栄圏総合貿易年表」であると考えた。
- 4) あくまでも典拠資料において「II 飲食物」のカテゴリーに示されている数値を合計したものである。現実には典拠資料に掲載されていない少額の品目も存在すると思われることを付記しておく。
- 5) 「泰国」「仏領印度支那」「朝鮮」などは相当量の米輸出をおこなっているが、当該カテゴリーには穀物を含まないのがこの数値となる。また「台湾」は米も総輸出額の3割を超える相当量の輸出をおこなっており、当該カテゴリーとあわせると食料輸出に特化していることがうかがえる。
- 6) いわゆる「日滿支圏」であり、「大東亜共栄圏総合貿易年表」においても、「日滿支圏」の区分で集計がなされている。以下、本論中でもその数値を利用した。
- 7) 「飲食物」で最大の品目は「馬鈴薯」の0.6%（S12）、0.5%（S13）である。



- 8) ここでいう米とはいずれも「I 穀類、穀粉及種子」の「米及粳」の項目にあたるものを指す。
- 9) 「葉茶」以外に「粉茶」の輸出もあるものの「葉茶」の10分の1程度である。
- 10) 工業製品輸出など日本の総額が大きいため相対的に「飲食物」の比率が小さくなるという側面はある。
- 11) ちなみに総輸出額に対する米（米及粳）の比率は28.9%（S12）、28.3%（S13）である。
- 12) 戦前の台湾の食品貿易については（荒木・林 2015）に詳しい。
- 13) ちなみに総輸出額に対する米（米及粳）の比率は33.9%（S12）、35.6%（S13）である。
- 14) ちなみに総輸出額に対する「大豆」の比率は35.0%（S12）、36.1%（S13）、24.7%（S14）、同「大豆粕」の比率は9.7%（S12）、9.7%（S13）、15.0%（S14）である。
- 15) 擔（担）は度量衡単位で60.478982kg。
- 16) 「大東亜共栄圏綜合貿易年表」の第5巻「東印度諸島」にあたるが、第1巻「泰国」が刊行された昭和16（1941）年9月は日本軍の侵攻（1942年2月）以前のため、ここでは「蘭領印度」とされている。
- 17) 卵製品の数量の統計数値は存在しないので貿易額で示した。以下、煙草、胡桃も同じ。
- 18) 中国からの鶏卵や鶏卵製品の輸出に関しては吉田（2005）に詳しい。
- 19) 水産物の数量の統計数値は存在しないので貿易額で示した。
- 20) 日本の欄の数字が手元の資料では黒塗りされているので正確に判読できない。正確ではないものの4.40百万金元と読めるためにこのような記載とした。
- 21) 昭和15年にはわずか1千個となる。
- 22) 煙草」の数量の統計数値は存在しないので貿易額で示した。以下、「其他ノ鮮乾塩蔬菜」も同様。
- 23) 昭和15年にはわずか448キントルにとどまる。以下、「和蘭」も同様に昭和15年は401キントル。
- 24) 煙草の数量の統計数値は存在しないので貿易額で示した。
- 25) 同年の輸出量10,958,627キロのうち同国向けが10,958,627キロと記録されている。
- 26) 量的には「砂糖」を下回るが、輸入額では遜色がない。
- 27) ヨーロッパ向け輸出量（同年表の「欧州大陸ブロック」の合計）は各々59千トン、42千トンである。
- 28) 「第5巻 東印度諸島」の発行された昭和17年8月には日本軍がシンガポールを占領しているので、この呼称となっている。
- 29) 「ミルク及同製品」のカテゴリーには他に「殺菌乳及ミルク製品」があるが、「コンデンスミルク」の2割程度の輸入額にとどまる。
- 30) ハンドレッドウェイト、ヤードポンド法による度量衡単位。
- 31) 「缶詰詰食料品」の数量の完全な統計数値は存在しないので貿易額で示した。以下、「水産物」も同様。なお、植民地等向けの移出を除いた輸出量は容器ともで244百万斤（S12）、253百万斤（S13）である。
- 32) 他所では仏蘭西や獨逸と表記されているがここではカタカナ表記となっている。各巻による表記の揺らぎがあるが、基本的には当該巻における表記を採用した。
- 33) 内訳は烏龍茶と紅茶がおおよそ半量ずつで包種茶はほとんどない。
- 34) 昭和12年は100%が日本からで、昭和13年にはそれ以外に「朝鮮」から8,160円の輸入がある。
- 35) 「水産物」の数量の統計数値は存在しないので貿易額で示した。「水胎及菓子」も同様。
- 36) 総輸出額に占める大豆の割合は39.1%（S12）、36.1%（S13）、28.7%（S14）となる。
- 37) この点に関しては米の輸出国においても同様のことがいえる。
- 38) 本論文の対象ではないが、「台湾」や「朝鮮」「泰国」「仏領印度支那」「ビルマ」などの米輸出もこれに含まれる。

## 文 献

- 荒木一視（2016）新義州税関資料からみた戦間期の朝鮮・満洲間粟貿易—日本の食料供給システムの一断面—。人文地理, 68, 44-65.
- 荒木一視（2017）戦前の日本の食品企業の海外展開—フードチェーン構築の諸類型—。Journal of East Asian Identities, 2, 1-20.
- 荒木一視（2018）『近代日本のフードチェーン 海外展開と地理学』海青社。
- 荒木一視（2019）近代工業勃興期の中国の食料海外依存—『中国各通商口岸對各國進出口貿易統計』からみた1920年代の食料貿易—。季刊地理学, 71, 53-73.
- 荒木一視（2023）1930年代後半の東アジアの穀物貿易—「大東亜共栄圏綜合貿易年表」からみた多国間・多地域間貿易と食料安全保障—。立命館地理学, 35, 37-52.
- 荒木一視・林呈蓉（2015）戦前期台湾における日本食材の需要—工業統計表と台湾貿易四十年表に基づく推計—。エリア山口, 44, 51-65.
- 大豆生田稔（1993）『近代日本の食糧政策 対外依存米穀供給構想の変容』ミネルヴァ書房。
- 大豆生田稔（2007）『お米と食の近代史』吉川弘文館。
- 木越義則（2020）近代中国における一次産品輸出産業の形成と発

- 展. 社会経済史学, 85 (4), 377-396.
- 小坂浩之・布施正暁・鹿島 茂 (2012) 貿易統計の不整合問題—既存研究の整理と数量データを用いた調整—. 運輸政策研究, 15-2, 20-31.
- 杉原薫 (1985) アジア間貿易の形成と構造. 社会経済史学, 51(1), 17-53.
- 杉原薫 (1996) 『アジア巻貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房.
- 竹内祐介 (2009) 穀物需給をめぐる日本帝国内分業の再編成と植民地朝鮮. 社会経済史学, 745, 447-467.
- 増田林平 (2004) 植民地期インドネシアの 景気循環:1830 年代~1930 年代. アジア経済, 45(3), 24-58.
- 矢ヶ城秀吉 (2010) 戦間期における台湾米移出過程と取引主体. 歴史と経済, 52 (4), 1-15.
- 吉田建一郎 (2005) 戦間期中国における鶏卵・鶏卵加工品輸出と養鶏業. 東洋学報, 86, 503-534.

---

〈作者略歴〉

荒木 一視 (あらかし ひとし)

1987 年広島大学卒業, 1993 年広島大学大学院文学研究科単位修得退学, 博士 (文学), 現在, 立命館大学食マ  
ネジメント学部教授